

歴史の大調整時代

「市場経済化はどこにゆくか」

21世紀、中国と世界は巨大な変貌を遂げ、あらゆる社会システムが大調整を経て人類がかつて想像し得なかった新たな社会システムを創出する。中国の市場経済化もそのような新社会システムの創出に通じる。

于 光遠

〈中国社会科学学院顧問
中国太平洋学会会長〉

インタビュー 編集部

「加々美光行

〈愛知大学現代中
国学部学部長〉

張 琢

〈愛知大学現代
中国学部教授〉

編集部 于先生は、アジア文明を含めた世界の全ての文明が来世紀には大調整時代（世界歴史の大調整時代）に入るといふご意見ですが、どういう意味でしょうか。

于 私が書いた『アジアの文明と文明のアジア』を読まれたことがありますか。編 残念ながらまだ、ありません。

于 その意見は、この私の最新の著作の中で提起したものです。アジアの文明と文明のアジア、そして世界歴史の大調整

時代に関することで、私どもの中国太平洋学会が国際シンポジウム（一九九六年五月）を開催したときのテーマとなったものです。もつとも、もつともとの会議テーマはもつと限定的で、「太平洋と中国」というものでした。対象世界を少し狭く限定して太平洋としたのですが、テーマは元来が世界全体を対象とするもので、アジアや太平洋に限定されるものではありませんでした。それで書物では、このテーマを最大限に徹底して語ったのです。

私は、二十世紀の五〇年代末から始まって、おそらく二十一世紀全てが私たちの時代であると考えます。現在、多くの人々が二十一世紀について語っていますが、それはせいぜい二十一世紀の前半までについてであり、もつと短いものもあります。私は、そうしたやり方には満足できません。これでは、私たちに隣接する時代を指すにすぎず、一世紀の感じではないと思うからです。

二十一世紀の全体がどんなものになる

かを予測できる人はいないでしょう。この時代は二十世紀の二〇年代がすこし過ぎた頃から調整を開始し、まず資本主義の世界が調整の時代に入ったというのが、私の考えです。それは戦争と革命の時代であり、二つの世界大戦も起こりましたし、革命が展開され、資本主義が深刻な失敗に遭遇しました。そして、こうした失敗に対する反省から、調整が開始されたという経緯があるわけです。

例えば、あなたの国、日本は現在、武器を持った軍隊を派遣することはなく、ただネクタイをした人間を派遣するだけです。あなたの国内に、このことに反対したり疑義を呈する人は今もいますが、これは、過去の戦争に対する日本の反省の表明なのです。しかし、こうやって過去の事情を振り返ってみることよりも、未来を見つめることの方が大事です。

調節機能喪失期の反省

建国初期、わが国は福祉主義を実施し、人民資本主義を実施しました。これも、あの戦争に対する反省からでした。しか



于光遠 [Yu Guangyuan]

1915年7月上海市生まれ。中共中央顧問委員会委員、中国社会科学院副院長、同マルクス・レーニン主義・毛沢東思想研究所所長、同顧問、中国自然弁証法研究会理事長などを歴任。現在、中国太平洋学会会長。1978年から79年にかけて、改革開放政策の骨子を形成する際に鄧小平を支えてその立案に貢献し、その後も改革政策の節目ごとに重要な役割を果たす。

し、私たちはその方針を堅持するうちに、袋小路に陥ることになります。そこでいよいよ社会主義に学ぶということになったのですが、実際の歩みはあるべき道筋からかけ離れてゆき、社会主義を過度なまでにやっただけです。こうして私たちは舞い上がってしまいました。私たちは社会主義国家の勝利に陶醉していました。やれ第二次世界大戦に勝利した。次は、第三次大戦にも勝利するというわけです。

中国の大人物の言葉に、こういう意味のものがありました。「この時代とは、いかなる時代だろうか。すなわち、資本主義が日々没落し、社会主義が日々勃興する時代である」。事態をこうやって過度に単純化したのです。

中国はこうして自己調整の機能を喪失して、たいへんな弊害を生んだため、その社会主義は実際には衰退していったのです。中国の文化大革命がその典型です。ソ連にしても、人民の生活は一向に改善されることのないまま、アメリカに挑発されて地球規模の戦争を繰り広げ、莫大

な資源をその戦争準備に使い果たしたのでした。その結果、一九九〇年代に世界史に残るような新しい地殻変動が惹起され、社会主義国家の全体が改革と調整を否応なしに迫られたのです。

その改革は、資本主義に比べて半世紀近くも遅れています。もう半世紀早ければ、私たちも今ごろ世界の最前列を歩んでいたでしょう。けれども、半世紀の遅れが私たちを落伍させてしまったのです。

にもかかわらず、この世界は取り返し不可能なものではありません。マルクス主義者は早くから、事物が前に向かって発展することを理解していたはずで、「眼を前方に向ける」(向好看)とは、鄧小平のある論文の論題です。鄧小平はこの文章を書くにあたって、まず私に命じてある人物に草稿を執筆させるとともに「思想を解放し、事実在即して真理を追求し、一致団結し、眼を前方に向ける」という三頁のレジュメを私に送付してきました。おかげで、文はうまく仕上り、二、三日で書き上りました。最後の論題

も鄧小平が決め、堅実なものになりました。

旧来の枠組みの崩壊

世界の歴史が発展の途上にある以上、九〇年代のような激しい地殻変動があっても、何を恐れることがありません。恐れるのではなく、その重大さを自覚しなければなりません。一つの社会主義の国家の指導者として、高級幹部もそのことを自覚しないうすまじょうか。私の自覚の程度はと聞かれるかもしれない。私の自覚は、そんなに深いものではないかもしれないが、すくなくとも次のことは肝に銘じているつもりです。

つまり、改革はたいへんな進歩であつて、一五〇年の調整を経れば、資本主義も旧来の資本主義国家ではなくなり、社会主義も旧来の社会主義国家ではなくなり、世界の配置も旧来の配置ではなくなる、ということなのです。どんな風になるかは分からないにせよ、旧来のものと全く異なった世界が現れることだけは確かです。多くの人が述べるように、それを平

和と発展の時代といつてもよく、ポスト冷戦の時代といつてもよいのですが、しかしその本質は何なのか。それは、中国で言えば改革開放の時代であり、世界で言えば大調整の時代に他ならないのです。

私は一人の社会学者として、過去の中国において指導的責任を有した社会科学者として、この大調整時期の歴史学、政治学、経済学、法学、社会学、国際社会学、その他あらゆる社会主義研究を中国に適合したものに呼びかけたい。

以上が私の書物の大意です。さらに、もう一つ付随的なものですが、この書は、文明についての一般的考察を行い、こう述べました。

野蛮と愚昧の歴史から文明の時代へ

人類の歴史には、蒙昧の時代、文明の時代、野蛮の時代が見られます。人類史の大部分は文明の時代と野蛮の時代が占めます。人類の文明時代は、中国では先秦、ヨーロッパではギリシャから現在に

いたるわずかの期間にすぎません。そのため、現在でもこの世界には多くの野蛮と愚昧があります、広義に言えば戦争こそが野蛮なのです。二十世紀にも、ドイツのヒットラーがあり、日本の軍国主義があり、現在ではオウム真理教がある。中国でも、これらよりひどい多くの教派があつて、腹立たしいことです。アメリカにもヨハネ真理教なるものがあるらしい。これらが人類の野蛮を表現しているのです。

もちろん、人類の歴史の進歩はたいへん迅速です。私はエンゲルスが述べた「文明の発展はその始まりからの距離の平方に逆比例する」という言葉に賛成します。ただ歴史の進歩は迅速ですが、人類の歴史がつかまるころまだ短いため、私たちは今でも、野蛮や愚昧、邪教と闘うために多くのエネルギーを費さざるをえないのです。

現代中国には、人体特異機能(超能力)や人体科学といった邪教的ないかがわしいものがある。十五回党大会における発言にも、こうしたものに言及するものが

あつた。一部にはこれを信ずる者がいるが、私はこうしたものは腐敗に相当すると思う。共産党は腐敗していますが、それには金銭の腐敗もあれば、思想的な、政治的な腐敗もあるのです。

湖北に張治祥という男がいます。政治協商会議の委員ですが、実は迷信宗教の教主なのです。彼が昨日、人民大会堂で報告を行いました。湖北の現地では寺の教主のリーダーが七天を学習していて、「七天の学習はマルクス・レーニンを十年読むことに優る」と言っているのだそうです。こうした党員に活動の余地を与えてはいけないと思います。

世界の歴史が大いに進歩し、二十世紀の市場経済が発展したとはいつても、まだまだ遅れたものは残っているのです。麻原がそうですし、張治祥がそうです。

二十一世紀はまだ始まつておらず、これから百年の未来を展望しなければならぬのですが、科学技術もこの百年には大いに発展するでしょう。私は、最初の原子爆弾を広島に落とすことには反対できません。もし落とさなかったら、日

本は無条件降伏したでしょうか。中国の東北三省では、まだたくさんの人々が死なねばならなかったでしょう。日本本土の決戦でも、無数の死者が出たに違いありません。原子爆弾は、天皇が無条件降伏する有力な理由となったのです。

しかし、二発目の原子爆弾を落とすまではなかった。原子爆弾の脅威に対しても反対してゆかねばなりません。一九四二年、相対性理論を発明したアインシュタインが、学者として原子爆弾に反対するとの書簡を、ルーズヴェルトに送ったことは賞賛すべき行為です。

二十世紀の科学は大いに発展しました。二十一世紀にはもっと急速に発展するでしょうが、それがどんな事態をもたらすかは分かりません。科学と技術は第一の生産力であるとは考えます。この点は二十世紀が証明しましたが、二十一世紀はさらに顕著になるでしょう。全世界の経済発展のバイがさらに大きくなったなら、これを資本主義にも社会主義にも分けることができますが、バイが小さくなれば摩擦が起きることになります。私

が自著で付随的に語った文明の問題とは、このバイの大小の問題なのです。

二十世紀の科学界の眩目すべき成果を放棄してはなりません。二十一世紀の科学界の任務は、地球の大きさをはつきりと認識して、バイをより大きくすることです。地球で開発利用がなされているのは、まだほんの一部で、海水の利用など大いに発展の可能性があるのです。

二十一世紀の人間はもっと心を開いて、視野を拡大すべきです。資本主義の視野も限られていますし、社会主義の視野も同様です。人類には教育が必要で、学者は人類の覚醒を呼びかける任務があることを認識すべきです。

以上が私の最初の考察のあらましです。十五回大会が終われば二十一世紀がやってきます。十五回大会は小さな出来事にすぎない。共産党内には、この大会が大きな出来事だと考えている人もいますが、私は違います。私は小さな出来事だと申しました。自分の心は開かれて

社会主義初級段階論の歩み

編 十五回大会では、江沢民が社会主義初級段階について言及しましたが、これについてお考えをお聞かせ下さい。

予 初級段階は、十五回大会で始めて提示されたものではありません。そもそもの発端は、一九八三年の十三回大会で出された「第三三条」です。海外での初出は、ハンガリー出身のアメリカ学者が一九七〇年に提出した社会主義初級段階システム論だと言われています。私はこのアメリカ学者の説いた内容を知りませんから、ここでは中国における社会主義初級段階論について説明します。

そもそも発展した段階があつて始めて、より低い段階は何かという議論が起るのです。「第三三条」は一九八一年の「(建国以来の党の若干の) 歴史問題に関する決議」をめぐる論争の結果として生まれたものです。

マルクス・レーニン主義研究所に二人の著名な人物がおります。蘇紹智と馮万端です。中国はレーニンが述べたような

社会主義段階にはなく、もつと低い過渡段階にあるのだという考えを彼らは提起しました。私は、こういった提起の仕方は誤解を招きやすいと考え反対しました。ところが、胡喬木と鄧力群はこれは大問題だとして、『経済研究』誌上で批判を展開して、反批判を認めないとしたのです。しかし私は、中国が社会主義初級段階にあるという最低限の認識は持つべきであると考えたものですから、その後、公然と名を出して、「中国が社会主義の初級段階にあつたとしても」という文章を書いたのです。事情は、以上の通りです。

八一年と八二年が論争の第一段階とすると、八五、八六、八七年は第二段階でした。一九八六年に中共中央は精神文明に関する全体会議を開催しましたが、胡喬木と鄧力群が共産主義教育を語らねばならないと言ひ、共産主義をむやみに振り回しました。私たちはこれに反対し、「初級段階論」を持ち出したのです。現在は初級段階に属しているのだから、そんなに高い調子の歌をうたうべきでないと言つたのです。

あのときの決議は結局、鄧小平の同意の下に採択されました。それは、共産主義を現実政治において振り回す左傾の思想との闘争で、初級段階を武器に使つた最初の例です。初級段階は道德の問題に限定できませんが、それが道德や氣風に関わる以上、道德の建設においてきわめて重要な問題を提起しているのです。

十三回大会では、趙紫陽が胡耀邦の後任として、初級段階を引き続き党の基本路線にすえました。十三回大会の報告の内容にその点は表れています。

十四回大会は鄧小平が南巡講話で語つた経済問題を中心に議論がなされました。これが初級段階論の第三段階ですが、この時点で初級段階が提出された意味は、頭をハッキリさせ、カッカすることがないようにさせることにありました。すなわち、市場経済と多種所有制は初級段階の問題であるのみならず、初級段階を経過してもやらねばならない問題であつて、市場経済や多種所有制に制限を設けてはならないのだ、ということでした。

初級段階が少なくとも百年は続くところには書かれています。さらに五十年は必要でしょう。なぜなら、建国以来すでに五十年近くが経過して、そこに五十年を加えれば、百五十年となるわけですから。これまでもそうやってきたのだし、これまでやってきたことを、さらにやるべきなのです。

私有制もまだ必要です。十四回党大会の政治報告は私の意見に反対するものではありませんでした。私としては、これらの事情をはつきりさせ、誤解のないようにしたかったです。市場経済の方向に進むことと、中国がいま初級段階にあ

ることとの間には相互の関係はなく、二つを混同することは許されないことです。

もともと私たちが初級段階を提出したときには、中国はまだ市場経済に進む覚悟はできていなかったのですが、今や市場経済を導入した以上、市場経済がきわめて重要なことを認識しなければならず、これが根本的な調整における最大の問題なのです。そこに誤解を生じてはならなかったのですが、この書物の中ではそのことを論じていません。今後、議論したいと思います。ここでは市場と市場経済の問題が主要なテーマになるでしょう。

体制を越えた調整の時代へ

編 この百年の間に、資本主義は自らの改革を進め、社会主義の長所を吸収してきました。ソ連の解体や中国の一九七九年以来の改革開放について言えば、中国を中心とする社会主義の改革は、資本主義がまず推進してきた改革を、社会主義が引き継いでゆくという構図です。しか

し来世紀には、これら二つの体制はともに調整の過程に入るとお考えなのですね。

于 ただし資本主義は二十世紀の半ばにまず調整を開始し、社会主義は一九八〇年から九〇年にかけてそれを始めました。五〇年の遅れがあるという条件の違いが出发点にあります。

編 さらに五〇年がたつて、世界の歴史が大調整の時代に入ったなら、社会主義は資本主義よりも一歩前を進んでいるということになりませんか？

于 今や二十一世紀を真近に迎え、二つの体制はいずれも調整の段階に入っています。調整後にどうなるかは分からないし、説明のしようもありませんが、いずれも現在とは違ったものになることだけは確実です。二つの体制を比較することはできないし、未来の社会主義がどんな社会主義となるかを、現在から想像することもできないのです。

中国の社会主義初級段階にはこれといった変化は起きないでしょうが、豊かになっていることは確かです。現在の広東

や上海はもはや初級段階とはいえませんが、半世紀もすれば、広東や上海以外でも北京などいくつかの大都市では、わずかに豊かな社会と呼ぶに足りないという程度になるでしょう。現在はなお小康段階にあるといったところです。

しかし広大な貧困地域とは言えば、チベットから青海、内モンゴル、新疆にいたるまで、多くの内地に広がっています。陝西省の安康地区にある十の市・県・鎮を例に挙げますと、これら貧困地域の経済水準は上海の一つの鎮にも及びません。その唯一の生産品は葉ですが、利益にはなっていないくて、中央の財政援助を受けている状態です。二百万人強の人口で、その生産高がわずかに二十億元余りなのです。

初級段階といっても何も特別なものはありません。このように、社会主義の姿には今も目立った変化がないから、私は初級段階という規定の仕方に賛成するのです。私たちはもっと現実に眼を開かねばならない。私は中央に書簡を送って、これらの地域への援助を訴えたいので

す。

振り返ってみれば、中国は一九五六年に三大改造を終えてから、初級段階に移行了しました。しかしその後、すぐに誤った政策を出して階級闘争を始めたのです。去年、私は東京を訪れたさい、こう言われたことがあります。中国の経済学はマルクス主義経済学を、日本の経済学は近代経済学を中心としてきましたが、あなた方マルクス主義経済学を奉ずる国家はどうしてこんなにも貧しく、自分たちの方が豊かなのでしょうか。

私はこう答えました。それには二つの理由がある。第一に、第二次世界大戦が終わったとき、マッカーサーは日本の経済改革を進め、三井などの財閥資本を没収しました。第二に、朝鮮戦争とベトナム戦争の二度にわたって、日本は特需景気に恵まれました。それに対して、中国の経済が振るわないのは、文化大革命以前に初級段階に入ったにもかかわらず、その後の時期の経済政策が拙劣をきわめたからです。ただし、これについて経済学者が全責任を負うことはできません。

なぜなら、かれらは皆、拘禁されていたからです。

多くの問題が未解決であるのは、経済問題の解決に限界があるからです。世界の歴史の発展において、人間の役割には限界があります。私はマルクス主義を信奉しているとはいっても、上部構造の作用には限界があると思っています。

私は「細雨閑花」という書を好んで書くのですが、細雨はからだに落ちても見えず、閑花は地上に落ちてでも聞こえませんが、そのように、世界は視覚や聴覚では捉えられないうちに発展するものです。

人間が経済を発展させていく過程で、それを促進したり妨害する人間の行為には限界があるのです。

編 日本の経済学者は、日本経済が戦後三十年間に急速な発展を遂げたと言いますが、中国の社会主義の発展はそれよりもは緩慢です。これは、日本の資本主義経済が優れていたからというよりも、当時の国際関係という外部環境に負うところ

が大きいということですね。

敗を経験しました。この同一の世界において、資本主義や社会主義は孤立しては存在しえません。私たちマルクス主義のレベルは、この点の理解が不十分です。

編 中国の社会主義と資本主義を比較することはできず、二つの制度は相互の調整を進めなければならぬというお話は、正鵠を得たものだと思います。ただ、中国が社会主義初級段階という概念によって百年を経過すれば、より高度な社会主義を実現できるかと言えば、必ずしもそうとは言えないのではないのでしょうか。

于 初級段階を離脱すればどこも皆、広東や上海と同じようになります。その際には広東や上海はさらに発展している可能性があります。しかし、初級段階は初級段階なのです。こうした現実を直視するならば、レーニンの社会主義の概念に賛意を表することはできないでしょう。

レーニンの概念を否定しないかぎり、共通の言語を分かち合うことはできないのです。十五回党大会の前に、私は「社会主義所有制システムに関する辞典」を

執筆していました。まだ完成していませんが、一部をあなたにさしあげます。「社会主義発展段階辞典」という書物も編集しています。

共産という概念

編 日本の学者は、中国の社会主義初級段階を多種所有制と見なしていますが。

于 それは誤った考えです。初級段階に属さない中国のあらゆる時代も、多種所有制に基づいているのです。初級段階を終えても、中国が多種所有制に基づくことと変わりはなく、多種所有制と初級段階とは関係がないのです。

編 高級社会主義を共産主義と同一視することはできますか？

于 共産主義の概念によって中国を語ることは適切ではないと思います。「共」とは、この場合、動詞であり、「産を共にする」というのは「産なき社会」（無産社会）で、財産のないことを意味します。原始共産制のたぐいなら、（人民）公社制度がそうでしたが、所詮共産ではありませんでした。そもそも「共産」と

いう言葉は、明治時代の日本の翻訳語に由来するもので、この点については、日本人であるあなた方に研究してもらいたいところですよ。

私の考えを言えば、共産には二つの意味があります。一つの意味は動詞であり、共産共妻といった場合がそれです。もう一つの意味は行動です。一八四八年にマルクスは、共産主義は未来の目標ではなく、現実における行動であると言いました。その後、共産主義が袋小路に陥ったときに、共産主義という言葉をしばらく用いないようにしようと言ったのはエンゲルスです。彼は、死の二年前にカウツキーへの手紙の中で、私たち（マルクスとエンゲルス）はもう何十年も共産という言葉を使用していない、共産とは制度ではなく、行動であると書いています。エンゲルスは、さらにこう述べています。「共産主義という言葉は、今のところ広く使用すべきものではないと思います。もつとはっきりした意味が表現できるときになつてから使うのが良く、使うときにはきちんと注釈を加えるようにしなけ

ればなりません。というのも、すでに三十年にわたつて、この言葉は使用されていないからです」（一八九四年二月十三日『マルクス・エンゲルス全集』中文版、三九卷二〇三頁、「カウツキー宛て書簡」）。これと同様の例ですが、社会主義や資本主義にしても、それらが百年後にどんな風に発展するか、比較のしようもないのです。歴史の変化に応じて、言語も含めた概念体系も刷新されなければなりません。

それにしても、社会主義の言語を混乱させた元凶はレーニンに他なりません。彼は『国家と革命』に、こう書いたのです。共産主義の第一段階は社会主義と呼ばれることが一般であると。しかし、マルクスとエンゲルスに関するかぎり、こうした「一般」は当てはまりませんでした。レーニンは、マルクスとエンゲルスを「一般」の外に排除したわけですが、これは筋の通らない話です。

レーニンはこのとき、社会民主党の名称を捨て去り、社会主義とか民主という言葉も好まず放棄しようとしたのです。

民主は今でこそ必要だが、将来、国家が消滅するとともに消滅する、とレーニンは書いています。その一方で、それほど将来のことを考える必要はない、社会主義は今必要なものだが、民主は遠い将来のものである、とも書いています。この二つの発言は矛盾するものです。

レーニンはこのように、社会主義はたいへん短い期間のものだと考えたわけですが、私はそうではなく、社会主義はたいへん長い期間にわたる、共産主義よりも優れた制度だと思っております。これは私個人の見解であり、先ほど紹介した辞典などを執筆しているのは、私独自のこうした言葉を用いて他者と話がしたいからです。将来『ある経済学者の経済学辞典』といった書物も出版したく思っており、もう何年も準備をしていますが、まだ編集が終わっていません。言語や言語理論にも改革は必要なのです。

中国の言語について言えば、日本の翻訳語に攪乱されている姿が目立ちます。哲学言語で言えば、「対象」がそうですね。面と向かって立っているのは「人」であ

って、「像」ではないのに、こんな言葉が使われている。これはヘーゲルの用語が日本に紹介されたときに、日本の哲学界がカント主義で染まっていたために、「対象」といったカント哲学的な用語に翻訳してしまったのです。今となっては、この言葉を翻訳し直すことは不可能です。

「概念」という言葉も問題があります。ほんとうに理論的な仕事をしようと思えば、こうした言語面からの探究が必要ですが、これはきわめて労多くして功少なき仕事です。

社会主義公有制

私は、公有制というのは社会主義に限られた特徴ではないと考えています。奴隷社会にだって公有制はあるのです。「公」と「私」という言葉がどうやって現れたかは、「公を以て私を滅する」という表現がいつごろ用いられたかに関連しています。『周書』（これは周王朝の文王の言語の集成です）によれば、周の文王はその統治の始めにあたって、あら

ゆる官僚に対して、それまでの「公」の概念は「私」にすぎないと宣言したそうです。彼の「公」とは「普天の下、王土にあらざるはなく、率土の兵、王臣にあらざるはなし」に言うときの「公」であり、つまり文王が「公」を代表するという意味でした。この文王に比べれば、秦の始皇帝などはとても公有制の導入に成功したなどとは言えません。万里の長城の完成さえ、ままたらなかつたのですから。

公有制が社会主義の特徴ではない以上、私は最低限、「社会主義公有制」といった表現を使う必要があるのではないかと提言したいのです。そうした表現を使えば、少なくとも、私たちの公有制が一般的な公有制ではないことをはっきりさせることができますし、公有制を私たちの社会主義の基本制度のなかにしっかりと定着させ、社会主義公有制を主体としながら、多種所有制経済との共同の発展を図るという私たちの基本的な経済制度を表現できるからです。

この社会主義公有制には二つの含意が

あります。一つは今のべたように、公有制が一般の公有制ではなく、社会主義公有制であるということ。二つは、多種所有制もまた私たちの基本的な経済制度に属するものであるということです。この二番目の含意からは、これまで指摘されなかった、中国における私有制の合法的な地位が引き出されてきます。

公有制を提示するだけで社会主義公有制を提示しなければ、思わぬ誤りが生まれる可能性があります。なぜなら、社会主義を主とするか資本主義を主とするか（姓社姓資）を対立させるこれまでの抽象的な議論の代わりに、やはり抽象的に公と私を対立させる議論を持ち出すことになるからです。決して公だから良いのではなく、公にも社会主義にも問題があることが、それでは分かりようがないのです。

十五回党大会の政治報告において唯一修正意見が求められたのは、じつはこの問題でした。報告中に少なくとも一か所、「社会主義公有制」という表現を盛り込むべきだというものです。

一九七八年に私は「社会主義公有制における労働に応じた分配」という文章を執筆して、高級党校で何度も講演しましたが、この文章は「社会主義公有制」に関する私の証拠文献です。もつと重要な証拠は、一九八二年の第五回全国人民代表大会第五回会議が採択した憲法の次の文言です。「わが国の生産手段の所有に關する根本制度は、社会主義公有制である」。当時は現在のようない「公」と「私」の議論の背景がなかったものの、この一句がないと明瞭さを欠くので、全部で四か所も触れられています。これは、現行憲法の第六条に当たります。公有制、一般公有制、社会主義公有制を区別せずに混同して使ってはなりません。多分第三十条だったと思いますが四ないし、五の段落を使って、今回の十五回党大会の政治報告でこの点を提出したのです。

吟味された言語での議論

学者たる者、こうした事情を念頭に置いて、これらを繰り返して吟味しながら、公有制の概念を議論して頂きたいと思

ます。そうでなければ、学者たる資格はありません。

私について言えば、批判と吟味を経ない言語は使用しないことにしています。例えば「過熱」という言葉です。この言葉を用いないのは、意味が不明瞭だからです。

「過熱」には二種類の意味があります。一つは頭痛発熱の意味です。発熱はかまわれないが過度はよくないという。しかし何が過度なのかは言い得ないし、原則がないのです。もう一つの意味である「熱情」については言えば、熱情で熱くなるのがまずいのでしょうか？ これも反対するに当りません。ですから、私は「過熱」という表現をしないのです。

学者には学者としての価値があり、政治権威ではないのですから、科学的な原則にしたがって物事を判断をすべきです。

「いかなる文献も妥協の産物である」。あなたも私の意見を提出することができます。理論的に完成されておらず、徹底もされていない文書であっても、個

人の意見としてなら提出してもかまわないでしょう。他人の許可を求める必要はないのです。つまり、理論的な文章は必ず個人の意見として出され、組織に関わる場合に批准と行動が必要となるのです。

「独立的な思考は真理にのみ服従する」。「民主集中制はしばしば誤りに従う」という言い方があります。全員で討論するさいには服従が必要となり、誤りでも服従が必要となってきます。そうでなければ、組織として成り立たず、その場合、真理にしか従わないという原則は通用しません。皆がおのおの別行動をとれば組織は働かなくなり、それから、それで共産党は民主集中制をやるのですが、結果はしばしば誤りを犯すことになるので、偶然のことではないのです。

学者の余興

私の仕事には三つの要素があります。第一は、理論、歴史、政治を語ることにあります。すでに退職した後、これらが習性となっています。第二は、地方の企業

や個人を援助して意見を述べることで、第三は、遊民的な余興です。

論理学者の金岳霖は、この余興に関して面白いことを述べています。私たちのやること全てが必ずしも一定の意味を持たなくてよいと言うのです。これに関連するのですが、マルクス・エンゲルスが往復書簡の中で、酒に言及したのは実に八百か所の多くにのぼっています。他の人はそんなことはやらないでしょうが、私は余興として、数えてみたことがあるのですよ。「酒拉坂」二百二十編は、そうした余興の結果生まれた私の文集です。

マルクスとエンゲルスも所詮、人の子であって、禁酒を誓った翌日に一杯ひっかけしてしまう人たちなのです。二人の著作の最後を飾るのは何と、酒に関する文章ですよ。エンゲルスは、そこにこう書いています。「ブランデーを一杯と、ゆで卵が一個あればねえ」。つまり、全ての書簡に重要な意味があるわけではない。そうでなければ、人間とても生きていけないものではありません。

社会主義初級段階の「第三条」に話を戻せば、胡喬木と鄧力群の反批判に迫られて執筆したという裏事情はあるものの、中国が社会主義初級段階に属していることを最初に指摘したのは、私でした。一方段階の問題を本当のところ指摘したのは馮文瑞と朱穆之です。ただ、彼らが唱えた過渡期段階論には私は反対です、大きな価値があるとも思えません。今となつては歴史的な思い出です。

現行憲法の第二条がどれほど意味のないものであっても、第三条があつて始めて、第一条と第二条が生きてくることだけは言っておかねばなりません。第一条と第二条だけでは、いかにも風通しが悪いのです。先ほど述べたような、ちょっとした余興に心引かれる私としては、そんな風通しの悪さに我慢がならないのですよ。

(一九九七年十二月二十二日)

十五回党大会報告 についての問答

于光遠

問…一人のマルクス主義者として、経済学者として、わが国の改革開放と現代化建設に関心を寄せている者として、十五回党大会報告をどのように会得するところがありますか？

答…多年にわたり、私は一貫して政治経済学の社会主義理論を追い求め、また全国各省市各地区の経済社会発展戦略を研究し、祖国のゆくえに関心を抱いてきました。十五回党大会が開催された日に報告を聞いてのち、その内容について簡単な検討を行なった結果、私はこの報告は今後のわが国の社会主義経済の事業に巨大な推進作用をもたらさうような指導的文書であると分かりました。

問…そのように判断した理由はどこにありますか？

答…少なくともいくつかの条項からそう考えたのです。第一条は鄧小平理論の旗印を高く掲げたものですが、当然非常に重要な意味があります。誰もがよく知るように、もし改革開放に関する鄧小平の理論がなければ、全党全国の人民は今後の建設の中で、明晰な頭脳を保持し、正しい方向を堅持することがどうしてできるでしょうか？

十五回党大会報告が鄧小平理論を強調したのははつきりした狙いがあったのです。少し前のことになりましたが、近年中国共産党内に、少数ではあっても吐き出すエネルギーが少なくない人たちが国家安全という御旗を振りつつ、その手中にある機構や出版物を利用して、今の社会生活に人々が満足し得ないでいる現象を一方的に誇張し、これを市場経済を實行した結果であると言いくるめ、いくつかの教条を持ち出し、文革中に使われた用語法を用いて、次々に「万言書」をばら撒き、鄧小平の改革開放の方針と路線のあら捜しをしてこれに反対し、歴史の車輪を押し止めようと画策しました。彼らの言論はでたらめで有害なものですが、それでも一定の影響をもたらしたのです。十五回党大会の報告はその彼らに大きな打撃を加えるものでした。こうした連中の言論に対しては、真つ向から対決し斥けるのではなくてはなりません。

問…第二条についてはいかがですか？

答…第二条では、報告は積極的に思想の解放を提唱しています。放を主張しているので、収を主張しているのはあり

ません。

問…その点はどの個所にありますか？

答…主に社会主義所有制の改革について論述し規定したところに見て取れると思います。社会主義所有制の構造改革は、思想解放における目下の焦点をなすものです。現在各地各部門はどこでも経済体制改革を推進する中で、所有制改革に係わる問題に少なからず遭遇しています。誰もがこの点の研究を進めながら、同時に積極的に推進しつつあります。しかし上述のあの連中は、目下進行中のこうした改革を、私有化をやっているとか、資本主義の復活をやっているとかと、ことごとく誹謗し、その叫び声は大変喧しい。所詮、社会の少なからぬ人々が歴史上の「左」傾の宣伝の影響を被って、改革に対し思い悩み、こうした言論を聞き入れて、ますます手足をすくめてしまうものです。ですから思想面での束縛を是非とも打破する必要があるのです。

十五回党大会報告が所有制の側面について行なった論述と規定は大変重要で、力強いものです。十五回党大会報告の中の一句を特にここに引用したいと思います。中国の特色を有する社会主義経済を建設することは、「すなわち社会主義公有制を主体としつつ、多種所有制経済を一緒に発展させるといふ基本的な経済制度を堅持しかつ完全なものにするということである」。このように論述し規定することが大変重要なのです。

党中央の文書の中に、わが国の基本的経済制度をこのよ

うに規定したことは、重大な革新と言うべきです。

問…この規定の重要性はどこにあるのですか？

答…二点あります。第一点。現在、所有制面の改革推進に反対している人々の主要な論点は、この改革が私有化をやり、公有制を破壊している点にあります。彼らは社会主義制度の下でどのような公有制が行われねばならないかを研究せずに、ただ公でありさえすればよいとし、公であればあるほどよいと言うだけです。抽象的な「公」と「私」との対立を用いて、鄧小平が南方視察講話の中で提起した「三つの有利」の原則にとつて替えているのです。今度の十五回党大会報告は我々の国家の基本的経済制度について語る際、特に「社会主義公有制」という概念を用いています。つまり「公有制」の三字の前にとくに「社会主義」という字句を加えたのです。この点是我々の必要とする公有制が一般の公有制ではなく、「三つの有利」が要求するところにかなう公有制であることを示しています。こう規定したため、あの連中の抽象的な「公」と「私」の対立という「でまかせ」は通用しなくなつたのです。

問…報告の中の一部の個所でも、「社会主義」という字句を加えずに公有制という言葉を用いていますが、それは何故ですか？

答…基本的な経済制度を語る際は「社会主義公有制」という言葉を用い、他の個所では「公有制」としています。簡略化した言い方です。

問…社会主義公有制という概念は十五回党大会で初めて提起したものですか？

答…違います。この概念の使用はもっと早く、私の知るところでは一九七八年に某氏が書名に使用しました。さらに一九八二年に早くもこの概念が中華人民共和国憲法の中に書き入れられたのです。一九八二年十二月、第五期第五回全国人民代表大会が採択した『中華人民共和国憲法』の第六条にはこう書かれています。「中華人民共和国の社会主義経済制度の基礎は生産手段の社会主義公有制にある」。ただこの言葉が最近の一時期、語られなくなっただけです。

《中華人民共和国憲法》のこの規定は、今回十五回党大会の報告に書き込まれた言葉の文献上の根拠をなすもので、憲法を採択した当時にはまだ現在ののような意味は与えられていませんでした。現に私は第五期全人代の代表で、この憲法を採択する際、手を上げたのですが、当時の私には上述のような認識はありませんでした。そんなわけで十五回党大会報告は一九八二年に採択された憲法——現行憲法でもある——に比べて一段と前進したものであることが分かるのです。というのはこの憲法中の社会主義基本経済制度の規定には非公有制経済のことが全く書き込まれていないのですが、十五回党大会報告の同様の語句の個所には、多種所有制経済に当然、非公有制経済が含まれると述べられているのです。党の文書の中で非公有制経済の存在と発展が社会主義基本経済制度の範囲の中に含み込まれたの

は、確かにこれが最初のことです。

報告の中でさらに明確に語っている個所があります。たとえば、「非公有制経済はわが国の社会主義市場経済の重要な構成部分をなしている」という言葉は、社会主義基本経済制度の規定中にある非公有制経済の位置づけについての補足説明とみなすことができます。過去、私たちが言ってきたのは、非公有制経済が公有制経済の補助的役割をなすということ、こうした言い方で公有制経済と非公有制経済の相互関係を表現してきたのです。今回、十五回党大会報告が非公有制経済について、社会主義市場経済の重要な構成部分をなすという言い方をして補足説明をしたおかげで、我々の認識はよりいっそう実際にかない、より明確で有力なものとなりました。

問…十五回党大会報告中、公有制の多種形式について論述した個所も重要なものではありませんか？

答…その通りです。十五回党大会報告のこの個所の論述も確かに重要です。周知のように、建国後まもない頃、「生産手段の社会主義改造」が語られました。当時わが国の公有制には二種類の形式、すなわち国家所有制と労働大衆の集団所有制の二つが存在しましたが、第十一期第三中全会以後、さらに多くの新たな公有制の形式が作り出されたのです、そして各種の新形式の採用を模索する努力がみなさんによって払われてきました。この間の多年の事実が証明していますように、このようにしてこそわが国の社会主義経

済の事業のよりよい発展を立派に促進することができるのです。しかしこの点について少なからず憂慮する人々もいます。今回の報告は公有制について行ったこの間の改革を肯定しています。報告はさらに、生産力の発展を促進しようる公有制の実現形式を探す努力を払うよう指摘しています。こうした論述はわが国の社会主義所有制の構造改革を励まし推進する上で重要な働きをなすものでもあります。

報告はさらに株式制を採用する必要性についても肯定しています。株式制を実施した当初の数年間、わが国で株式制を採用すべきかどうかをめぐり、議論紛々でした。この数年は株式制の実施に反対する言論は少なくなりましたが、この点をめぐって今も異なる議論があることを認めねばなりません。ですから十五回党大会報告がこの点をめぐる問題について語ったのは、必要なことであり、良いことだったと言わねばなりません。報告が株式合作制の採用を肯定したことは、実際の事業にいつそう現実的な推進作用があるのです。

十五回党大会報告にはさらに一言、次のような概括的言葉があることに注意いただきたい。すべて「三つの有利」になつた所有制形式は、社会主義に奉仕するために用いてよいし、また用いなければならぬ。この論述は、十五回党大会の所有制改革の面に関する精神が放であつて、取でないことを再度説明したものです。

問・わが国がなお社会主義初級段階にあるという問題につい

て少しお話しただけませんか？

答・中国がなお「社会主義初級段階」にあるという言い方が、党の文献中で最初に現れたのは、一九八一年六月二十一日の中国共産党第十一期第六中全会が採択した「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」の中のことでした。この決議の第三三条を調べて見てください。その後さらに一九八二年九月一日、第十二回党大会の報告の中にも書き込まれました。しかし、この二度の言及は中国がなお社会主義初級段階にあるという点について、党が初歩的な認識を持ったことを示したものにすぎません。この観点を一つの指導思想として、一部の誤った観点を真っ向から正し、今後の工作に指導的働きがなされるようになったのは、一九八六年九月二十八日に採択された党の第十二期第六中全会決議に始まると言わねばなりません。ただし、同決議の中ではこの言葉が、「社会主義の道德、氣風を樹立する」という問題を解決するために用いられただけでした。当時は一部に共産主義道德を強調して、物質的利益の原則に反対する論調がありました。決議がわが国がなお社会主義初級段階にあることを指摘したのは、この種の有害な左傾的論調に反対するためでした。当時、この決議の起草工作を主催した胡耀邦は、わが国がなお社会主義初級段階にあると認識する意義は、「社会主義道德、氣風の樹立」という側面に限定されるものでないと見ていましたが、党の第十三回大会がまもなく開催されることを考慮して、この理論の

より広範囲な意義についての論述は、十三回大会の開催を待つて解決することとしたのでした。その後十三回党大会の報告は胡耀邦同志が作成しないこととなりましたが、それでも一九八七年の十三回党大会報告の決議では、「社会主義初級段階における党の基本路線」が提起されたのです。今回の十五回党大会では、わが国が社会主義初級段階にあるという把握が綱領的な地位にまで高められました。確かに十五回党大会報告が指摘するように、党の綱領の中に社会主義初級段階の概念を明確に提起したのは、マルクス主義の歴史で初めてのことです。ただし「綱領」「路線」などの政治用語の含意は、さらに研究を進め、言葉上の規範化を図らねばならない。十五回党大会報告で使用された綱領という言葉は、「路線」ないし「基本路線」といった言葉よりも高邁な意味を持っていると私は理解している。

問・誰もが社会主義初級段階には時限があるはずという問題に関心を寄せているのですが、この点に応じた言い方はありますか？

答・報告は社会主義初級段階には少なくとも百年の時間が必要だと指摘しています。報告がまた指摘するところでは、社会主義初級段階は今世紀五〇年代中期の三大改造の基本的な完成時に始まったとしていますが、百年の時間とは少なくとも来世紀の五〇年代中期までを指すわけです。報告で「少なくとも」と述べているのは、つまりそれよりさらに相当長い時間、すなわち「工業化と経済の社会化、市

場化、現代化」の完成が実現するまでの時期になる可能性もあるのです。歴史上のいかなる発展段階にも、その段階に入りそして出る時間というものがあります。中国の社会主義初級段階もまた同様なのです。しかし中国の社会主義初級段階のこの時限の問題と、市場経済と多種所有制経済の存在とは別個の問題です。私の考えでは、中国が社会主義初級段階を経過したのちでも、なお市場経済と多種所有制経済は必要であり、その中には私有制経済や個人経営経済も含まれるのです。というのは市場経済と多種所有制経済はいずれも、物質的生産力水準が比較的低いゆえに生まれたというわけではないからです。社会主義初級段階においては、もとより市場経済と多種所有制経済を實行して物質的生産力水準の向上を促す必要がありますが、物質資料の生産力水準が相当の高さに達し、今日の世界の経済先進諸国なみになっても、やはり市場経済と多種所有制経済を實行する必要があるだろうと思います。いつになれば市場経済と多種所有制経済を必要としなくなるかは、当然客観的法则によつて別に決定されるのです。究極、どのような条件があれば市場経済を必要としなくなるかという問題は、現在議論する必要はないと思います。所詮、はるか遠い遠い先のことなのですから。

総じて言えば、十五回党大会以後、全国各地には改革と建設の熱気が巻き起こり、わが国の社会主義建設の事業を新たな段階へと躍進させたと私は信じています。